

良田平田遺跡

よしだひらたいせき

中世の水田
を発見!



<1区>



1区は4月下旬から始まった調査が終了しました。

奈良時代(約1300年前)のピット(穴)が複数みつかったほか、古墳時代から江戸時代までの土器が出土しました。みつかったピットは建物の柱穴ではなく、何の用途で掘られたものかはわかりませんでした。

<2区>

2区では中世の田んぼがみつかりました。この田んぼは、出土した土器から室町時代(約600年前)のものではないかと考えています。

田んぼは谷を利用して棚田(たなだ)状につくられています。室町時代は当時の谷の地形にあわせた曲線的な田んぼでしたが、江戸時代以降は作業効率や、より多くの収穫をもとめて直線的で広いものになりました。

地層を観察したところ、室町時代よりも古い田んぼも確認できました。どのような区画の田んぼがつくられていたのか、今後の調査が楽しみです。



田んぼの段が
曲線から直線に
変わってるが!

鳥取西道路の遺跡を掘る!

第26号 2011年6月23日

発掘調査で出土する須恵器の甕(かめ)の外には筋状の文様が、内面には波を重ねたような文様がついたものがみられます。

このような文様は、どのようにしてつけられたのでしょうか。



須恵器につけられた文様

須恵器は登り窯を使って1,300度の高温で焼いてつくられます。そのため、粘土の中に空気があると熱くなった空気が膨張し破裂してしまうので、叩き板と当て具を使って土器の表面を叩き締め、粘土の中にある空気をしっかり追い出します。

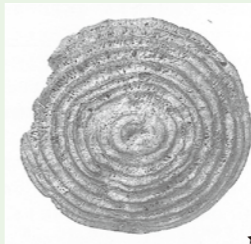
この時に、叩き板と当て具の表面の文様がスタンプのように土器につくのです。なお、これらの文様はきれいにつけられていることから、装飾の意味もあったという説があります。

土器の外
面と叩き
板



羽子板状の「叩き板」と呼ばれる工具の表面には、木目に直交する溝が何本も彫られています。

土器の内
面と当て
具



きのこのような形をした「当て具」と呼ばれる工具の表面には、同心円状の溝がついています。



叩き板と当て具の表面に彫られた溝は、空気を抜きやすいように工夫されたものです。そして、内面を当て具で押さえて、外面を叩き板でいねいに叩き締めていきます。

★叩き板と当て具は日置荘遺跡出土のもの(大阪府堺市)

(財)鳥取県教育文化財団
調査室
美和調査事務所
〒680-1133
鳥取市源太12番地
(旧鳥取湖陵高校美和分校内)
TEL: 0857-51-7553
FAX: 0857-51-7550
メールアドレス:
matsui@pref.tottori.jp

発掘通信

梅雨に入って、調査の工程をやりくりするのむと苦勞。天気予報に一喜一憂しながら作業を進めていく毎日です。そんな中でも、出てくる遺構や遺物に救われる思いです。調査も本格化し、次々と成果が上がってきています。これからも皆さんにさまざまな情報をお知らせしていきたいと考えていますので、ご期待ください。

鳥取県教育文化財団 調査室

検索

高住牛輪谷遺跡

たかすみ うしわだに いせき

地層の観察!



ショベルカーで表土を掘削すると同時に、手作業で調査区の中央を溝状に掘り下げる作業もスタートしました。

最初に溝を掘る大きな目的は、溝の壁を観察すること。溝の壁には、古い時代から現代までの間に堆積した地層が見えます。全体を掘り始める前にこのような溝を先行して掘ることで、土の堆積状況を確認し、発掘調査をどう進めていくのか考えます。

遺跡全体からみればとても狭い範囲ですが、どれくらいの深さにどの時代の地層があるのか、その場所は田畑として利用されていたのか村だったのかなど、様々な情報が詰まっています。

得られた情報を頼りに地下の遺跡をイメージしていく作業は難しいですがおもしろく、発掘調査の最初の山場といえます。



高住井手添遺跡

たかすみ いでぞえ いせき

縄文土器がザックザク!



発掘作業員さんによる掘削が始まってすぐ、たくさんの土器が見つかり始めました。土器の表面には、縄を押し付けたり (①)、棒や板状の工具でつけたような文様 (②) がみられます。



みなさんも、学校の授業で習われたかもしれません。そう。「縄文土器」です。

日本で、土器を使う生活が始まったのが「縄文時代」。その後、「弥生時代」、「古墳時代」、「奈良時代」...と続きます。



写真の土器は、縄文時代の中頃、およそ5000年前のものと考えられます。

その頃は、いまよりも海面が高かったと想定されており、湖山池はまだ海とつながっていました。この辺りには、海に面した縄文人の村があったのでしょうか。これからの発掘で明らかにしていきます。

高住平田遺跡

たかすみ ひらた いせき

水路の歴史をさかのぼる!



ショベルカーで新しい土を掘り下げると、水田の余分な水を排水するために地中に埋められた暗渠（あんきょ）と、幅 1.5mほどの水路が見つかりました。昭和 46 年の地図をみると、まさに同じ位置に水路が描かれていて、昭和 50 年ごろに水田が整備される前まで使われていたものであることがわかりました。

実は、この水路の下にはいく筋かの古い川があって、埋まっては掘り返すということを繰り返してきたこともわかってきました。水路の中からは室町～江戸時代初め（約 500～400 年前）の陶磁器が出土しており、その頃から水路をつくり、使われてきたのでしょう。



昭和 46 年の高住地区の地図 (国土地理院「国土基本図」を加工して作成)

さらに下の川からは、最も古いもので奈良時代（約 1300 年前）の土器も出土していますので、当時から、川の水を利用して米をつくっていたのかもしれない。そして、今回見つかった昭和の水路が、その最後の姿ということになります。

高住の人々がいかに水を利用してきたのか。今後の調査で明らかにしていきたいと考えています。



古い川を利用してつくられた水路
水路が崩れないように、石と木を使って護岸をしていました。

また、木や竹でできた暗渠がここにとりつけられ、排水していたこともわかりました。



水路からみつかった陶磁器 (奥:唐津焼皿、手前左:備前焼壺、右:同すり鉢)